

皮心伝心

耳学問と目学問

耳学問とは「人から聞いて、耳に入ってきた知識. 自ら確かめていない聞きかじりの知識」のことを指す。そのままの意味で捉えれば薄っぺらな知識のように思われがちであるが、実際にはそうではない。インターネットが普及した現在、調べれば情報はすぐ手に入るが、その情報を文字として単に目で追うのとエキスパートから直接話を聞くのでは、理解の度合いが違ってくる。対して目学問は「自分の目で探して、覚えることができた知識. 自ら確かめた調べあさりの知識」を指す。職人の世界で師匠、先輩の技をみて覚える、技を盗むがこれにあたる。医師の世界もある意味、職人の世界の一つと考えられる。皮膚科は皮膚病変を対象とする臨床医学の一分野で、皮膚科学は皮疹を肉眼で正確に観察し記載する、いわゆる記載皮膚科学として始まった。この皮疹の観察は皮膚科診療の基本であり、極めて重要なものであるが、その観察眼は教科書を読むだけでは身に付かない。経験を積んだ皮膚科医の診療をみて、時間をかけてその技を盗む必要がある。

また、皮膚科学の守備範囲は広く、皮膚になんらかの症状が生じるものはすべて守備範囲に置く。皮疹も、皮膚にのみ限局してみられ全身に関係ないものと、皮膚以外の臓器を含めた全身性疾患の部分症状であるものがある。病態も単純なものから複雑なもの、病態が解明されていないものまでさまざまである。私が昭和62年に入局した慶應義塾大学医学部皮膚科医局には、当時西川武二教授のもとに真菌症の原田敬之助教授、仲 弥講師、ケラチノサイト・コラーゲンの多島新吾講師、水疱症の橋本隆講師、新しい皮膚科学の清水宏講師がいた。今から考えても贅沢な話で、その道のエキスパートの診療や話を直接見聞きできたことは大きな財産となった。正直、教科書を読むよりも先輩方の話は面白く、深かった。平成6年からお世話になった杏林大学医学部皮膚科には皮膚免疫学・重症薬疹の塩原哲夫教授がいて、多くの知識を学んだ。これまで接してきた先生方とまったく違う視点、考え方を持ち、ユニークで新鮮な話を次々に聞ける環境が面白く、気がついたら21年杏林大学に在籍していた。

耳学問、目学問をするうえで大事なことは、事前準備として最低限の知識は身に付けておくことである。ある程度の知識を備えておかないと、みたり聞いたりしたことが消化不良で終わりがねない。せっかくの機会を無駄にする愚は避けるべきである。

私の耳学問、目学問の習慣は今も続いており、エキスパートの先生の話聞く機会はできるだけ逃さないように心掛けている。そして、諸先輩方にはとても及ばないが、後輩に耳学問、目学問を少しでも与えられる存在になりたいと考えている。

福田 知雄

(埼玉医科大学総合医療センター皮膚科教授)